テーマ
39
制限目安時間 20分
正解数（合格ライン３問） ／5問

Ⅲ-4　実存主義

サルトル「実存は本質に先立つ」

人間はどんなものにもなれる自由な存在であるが、だからこそ責任を持たなければならない。

ジャン=ポール・サルトル
Jean-Paul Sartre
1905年～1980年

パリに生まれ戦後に一世を風靡した実存主義の旗手。盟友ボーヴォワールと事実上の結婚生活を送る。主な著書は『存在と無』。

行動する哲学者

第二次世界大戦後、フランスに蔓延（まんえん）した危機的な精神状況の中で、華々しく登場したのが劇作家・小説家でもあった**サルトル**です。

サルトルは、実存主義哲学者として政治や社会活動にも参加し、「**行動する哲学者**」として世界的な名声を博していきます。その結果、1964年にはノーベル文学賞に選ばれましたが、権威というものを嫌う彼は、これを辞退しました。

そんなサルトルの哲学の根幹を成すものは、「人間は自分自身がつくり上げるもの以外の何ものでもない」という思想でした。神の存在を認めない彼にとって、人間は、神が定めた何かになるようにつくられているわけではなく、自分で自分のあり方を決定する自由を持つ、唯一の存在なのです。つまり、「私」がこの世に誕生した理由や目的を知る前に、「私」自身がこの世に存在し、その後に「自分は何者なのか？」と自問して、はじめて自分という存在の本質を考えるのです。

そのことからサルトルは「**実存は本質に先立つ**」と断じました。

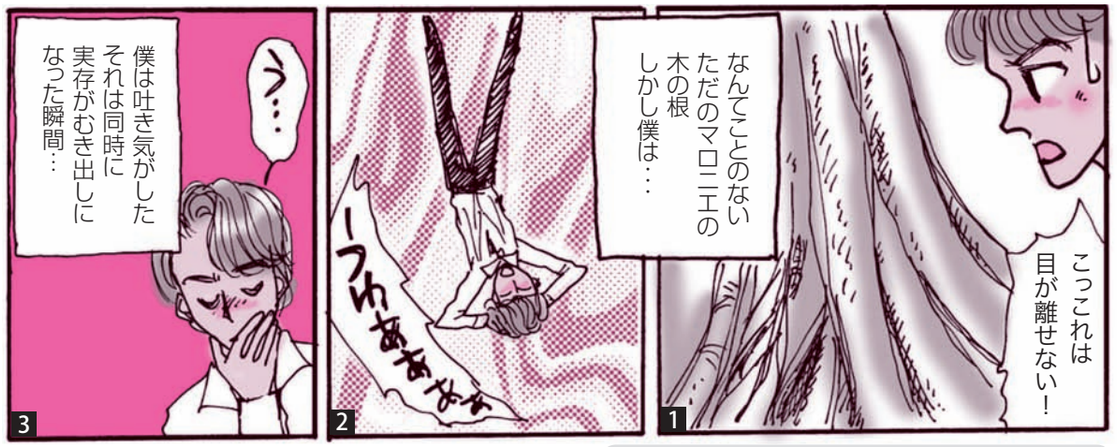
自由と社会参加

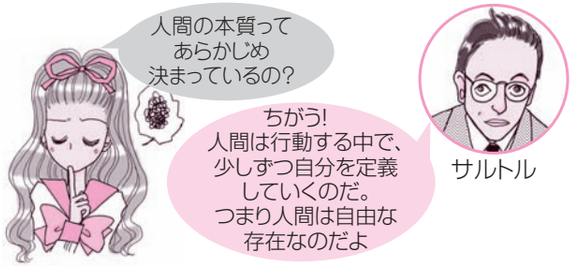
また人間は自由だからこそ、何を選択したらいいのか、どう生きたらいいのかわからずに、不安に陥ってしまうのも事実です。何の拠り所も助けもなく、すべて自分一人で選択しなければなりません。このことをサルトルは「**人間は自由の刑に処されている**」と表現しています。

すべてを自分で決定する以上、その行動には責任を負わなければなりません。そしてその中には、社会や人類の未来への責任も、当然、含まれるべきであるとサルトルは考えました。そうした態度を、「**アンガジュマン（社会参加＝自己拘束）**」という言葉であらわし、人間は一人では存在し得ず、他者との関係の中で存在しているからこそ、広く社会とかかわり、よりよい世界をつくるために貢献することが大切だと説いたのです。自由であるということは、他者の存在を尊重し、その関係の中で合意の上で自らを拘束する。これが実存の本質を理解している人間のあるべき姿であると主張しました。

このように、社会への参加を説くサルトルの哲学は、彼の人生そのものを社会・政治問題に積極的にかかわらせる力となったばかりか、母国フランスをはじめとして、日本も含めた世界中の人々に非常に大きな影響力を及ぼしたのです。

★僕はロカンタン。先日公園を散歩していたら…（サルトル作『嘔吐』より）





雑学豆知識
●小説「猿取佐助」
パロディ小説家として名高い清水義範の作品に、『ビビンバ』という短編集がある。その中の一篇『猿取佐助』は、なんと「サルトル」の人生や思想を、立川文庫のような講談調の文体で書いた、抱腹絶倒の珍小説。ただし、サルトルがどんな人物なのかを知っていないと面白さも半減するとか。ちなみに、猿取佐助の恋人の名前は、「暴母悪」。そう、ボーヴォワールと読む。

問題1　サルトルはどんな哲学者だと言われていましたか？
A 議論する哲学者　B 闘争する哲学者　C 行動する哲学者
❶

問題2　サルトルの言葉にあてはまるものを選んでください。
「人間は ❷ がつくり上げるもの以外、何者でもない」
「実存は ❸ に先立つ」
「人間は ❹ の刑に処されている」
A 自由　B 自分自身　C 神　D 本質
❷　❸　❹

問題3　「アンガジュマン」を日本語にすると、何でしょう？
A 自己確立　B 社会参加　C 奉仕精神
❺